

高校生の意識と行動に対する持続可能な開発のための教育（ESD）の影響に関する研究 —滋賀県立守山高校を事例として—

周一

キーワード：ESD, プログラム評価, 環境心理学, サステナビリティに対する意識と行動

1. 研究の背景と目的

持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development, ESD）は人のサステナビリティに関する知識、態度、能力と行動を向上させることを目指している。ESD は幅広い地域や国家で、初等教育から高等教育まで実施されている。ESD に関連する教育的なプログラムの実施状況を評価するため、筆者は滋賀県立守山高校を事例として、「スーパーグローバルハイスクール」(Super Global High School, SGH)というプログラムを考察した。本研究の目的は二つある。一つ目は SGH プログラムが学生のサステナビリティにたいする意識と行動に与える影響を把握すること、二つ目は学生の持続可能な行動を左右する潜在的な要因とバリアを明らかにすることである。

2. 研究方法

守山高校で SGH プログラムに参加していた高校一年生全員（274 人）を対象として、プログラム開催前と開催後のアンケート調査を実施した。この調査で主に学生のサステナビリティに対する態度、意識、責任感、行動意欲と実際の行動を把握した。その後、学生の持続可能な行動に関する行動動機とバリアをさらに明らかにするため、二つのフォーカス・グループ・ディスカッションを 16 人の学生を対象に実施した。最後に、アンケート調査とフォーカス・グループ・ディスカッションの結果を考察するため、いくつかの環境心理学の理論とモデルを応用した。

3. 研究成果及び提案

研究結果によると、学生のサステナビリティに対する態度、意識と行動意欲は向上した。しかし、実際のサステナビリティに結びつく行動には明確な変化は発見されなかった。この結果は調査された高校生のグループに態度と行動のギャップが存在することを示した。このギャップが存在する原因は学生の自信の欠如、行動に対する知識とそれを活用する能力の欠如及びほかの具体的な行動の実践に影響する要因に関係する。そこで、本研究は ESD プログラムが意識、オーナーシップ、エンパワーメントという三つのレベルから戦略的にバランスを取りながら実施していくことを提案する。また、本論文は新たなサステナビリティにつながる行動のモデルが提案しており、今後の ESD の実践に応用されれば、効果的な行動の変化が期待できる。